の弟に歸し、弟死するときは、尙ほ其の弟に讓るを以て常例とせり。

分娩

纏頭回婦の分娩するや、敢て他人の扶助を請はず。産婦自ら之を處理す。唯、難産の時のみ、穩婆に類する者を招きて扶助せしむ。然れども、其の手術甚だ粗暴にして、却て害を爲すこと多しと云ふ。出生したる子は、産後始めて母の目に觸れし物に擬して其名を命ず。故に犬足を見れば直ちに犬足と名づけ、馬頭を見れば馬頭と名く。又宗門に顯はれたる人の名に依ることと有り。皆母の望に任せて之を定む。

命名

隨て回民には、名ありて姓なし。彼等は男兒を尊び、女兒を喜ばざる風を有す回教の定則に依りて、男兒七八歳に達すれは、哥蘭經を誦じ、勢皮破の禮式を行ひ、親族朋友を招きて、祝賀の宴を張るを例とせり。

育兒

小兒の養育は、各種族共に之を重んぜず。夏は或は裸體にして放置し、或は裂布を被らしむ。冬は毛を裏にしたる皮服を與ふるも、兒童尙ほ寒を呼び、羊の埒内に入りて、其の間に潛居し、以て暖を取ること有り。客到りて其内に入れば、小兒の禿頭思はず羊毛中より、露はれ、眼光烱々、人を仰ぐの奇態に遭遇すること少なからずと云ふ。